



土手崎の花崗閃緑岩を貫くランプロファイアーの岩脈

地質博物館・能古島(3)

能古会会員
小川 誠

花崗閃緑岩

「地質博物館・能古島」(1)の地質図に示したように、能古島の上部を覆う玄武岩の下には、花崗閃緑岩(注)が片岩類とともに島を二分し、その北半部を占めて分布している。したがって、花崗閃緑岩は海岸沿いによく見られる。

また、西海岸では新鮮・堅硬な岩盤が露出するのに対し、東海岸ではほとんど風化してマサ(真砂)となり、表層がハンマーで削れる程、軟質となっている。これは何故だろうか。

その原因として、花崗閃緑岩は中生代白亜紀の一億年前に片岩中に貫入し、その後隆起して地上に現れた火成岩であるので、風化・侵食に晒された時間が長いこと、そして、石英以外の斜長石、黒雲母、角閃石などの構成鉱物が風化され易いことが挙げられる。

風化して鉱物相互の結合力が減少すると、岩の組織は保持していても全体の強度や固結度が低下して粗砂状のマサとなるのである。

ランプロファイアー

島内各地には、ランプロファイアーと呼ばれる厚さ数十cm〜1mの緑灰色の岩脈が花崗閃緑岩を貫いており、特に西海岸に多い。

写真は土手崎の海岸のもので、幅四十〜五十cmで直立し、北東―南西に伸びている。

西海岸の地形

西海岸を歩くと普通つた筈の道はなく、また、花崗閃緑岩の堅硬な岩盤が剥き出しになっている、北西の季節風による波浪侵食の激しさを物語っている。

すなわち、西海岸では、東海岸で見られた花崗閃緑岩のマサが、すっかり侵食されてしまい、内部の新鮮な部分が露出したのである。

花崗閃緑岩が侵食されると、その上部の玄武岩溶岩は支えを失って緩み、遂に崩壊に至る。こうして能古島の西側斜面は急斜面になったのであろう。

なお、この地形は玄武岩が噴出

してから現在に至る、僅か四百万年程の間に形成されたものなのである。

(注) 最近の研究によれば、花崗閃緑岩は北崎トーナール岩と呼ばれる。

変斑れい岩

白鳥崎と大波戸崎(おなとぎき)では、緑灰色の変斑れい岩の岩体が、防波堤のように西の海に突き出ている。それは周囲の片岩類より堅硬なので、風化・侵食に打ち勝ち、残っているのである。

また、この付近の変斑れい岩より南側の海岸では、緑色の礫が多いことに気付くが、これも、能古島の西海岸を襲う激しい波浪に変斑れい岩が侵食され、生産された砂礫が流れて南側の海岸を埋めたのであろう。



白鳥崎の変斑れい岩

能古砂礫層

地質断面図を見ると、能古島の標高100m前後の中腹部では、片岩類と花崗閃緑岩の上面が平坦で、その上を能古砂礫層が覆っていることがわかる。



北浦の能古砂礫層

この平坦面は古第三紀層堆積後、玄武岩噴出前に、能古島を含む周辺地域が準平原化作用を受けて形成されたものである。

つまり、能古砂礫層はその平坦面に堆積したもので、片岩類、砂岩などの礫を伴う砂からなり、厚さ数m、未固結で赤褐色を呈する。現在、この地層の分布は島の南部に限られるが、今後、調査が進めば、北部でもその分布が認められるかもしれない。

この地層は玄武岩に覆われるので、地層の形成は玄武岩噴出前である。

火道と岩頸

北浦の大きな波止の北側では、片岩の分布地域の中に、玄武岩が海岸沿いの南北約30mにわたりに露出している(満潮時は水没)。

火道はマグマが地上に噴出した時の地中の通路であり、能古島の山頂部を覆う玄武岩の一部はここを通って噴出したのであろう。

こうした火道は最終的には溶岩などで満たされるが、それが侵食に抵抗して岩塔状に残ったものを岩頸と呼ぶ。北浦のものは「侵食で破壊された岩頸」とも言うべき

ものであろう。

海岸段丘

能古島の南西の海岸には周りより約3m高い段丘面があり、昔はこの上に海岸沿いの道が続いていた。

段丘面は昔の海岸で、現在の海岸との高さの差はその間の海水準の低下、すなわち、陸地の上昇を示している。

しかし、今は波浪侵食で道はおろか、段丘そのものが削られ、砂礫層が露出して見る影もない。

こうして国土が侵食されて行くのは見るに忍びず、防人にもなりたい気持だ。(次号に続く)



北浦の玄武岩の岩頸

亀井家学を支えた女たち(4)

昭陽妻イチ 下の続

福岡地方史研究会会員

早 船 正 夫

◆生涯娼妓ノ類ニ近ズカズニ色ナキニ近シ

イチの夫昭陽の性格を語り伝えたものとしては、廣瀬淡窓(日田の儒学者・昭陽に師事)の懐旧談が、その要を得ている。

「昭陽先生は、気性が激しく、衆にすぐれていらつしやること、父南冥に似ておられた。たいへん感受性に富んでおられることは、父以上かもしれない。しかし、父がこまやかな礼儀作法や些細な行為には、あまり拘泥しなかつたために、罪を得たようなものだから、これに懲りて、自己を抑制しおもてへ出さないようにしておられた。

先生の親へのおもいやり兄弟へのもまごころの篤さは、これこそ天性のものであった。『生涯娼妓ノ類ニ近ズカズ、二色ナキニ近シ』妻以外の異性を知らずといつてもよか

つた)『懐旧樓筆記』

南冥に似て、酒は好きであったが、父のような酒の上の失敗をすることなく、酔えば眠ってしまう程度であった。

◆昭陽は生前に著述の出版なし

廣瀬淡窓は嘆息して、次のように惜しむ。「三、四十歳代から、家に閉じこもりがちで、著述に力を注ぐこと数十年、あたかも一日のようでした。儒学者仲間の付き合いは、あまりならず、武家や町人との交際も、必要な範囲はともかく、あまり喜んでおられなかつた。」

「門人の育成は、父と同じやり方であった。しかし門人から人材がどれだけ出たか、これは父に及ばなかつた。」さらにいう。

「昭陽先生のお書きになった著書は、数百巻あるだろうが、出版し

て世間に広く読まれている本は、一二もない。あ、惜しいことではないか。」

「役人としては、すでに藩学の廃止によって不遇な目にあつておられる。学界での扱い方も、また満たされていない。あ、実力からみて、世の中の扱いは実に酷薄である。」

「但し、後世に於いて先生の著述が出版されて、広く読まれるようになるなら、必ず注目の的になるであろう。」

◆しかしその実力は、広く認められていた

昭陽の学力は、当時九州のみならず全国でも出色のものであった。西村天囚(大阪朝日新聞記者で、後京都大学講師、宮内省御用掛。第一級のジャーナリストにして学者)は「九州の儒者たち」(明治四十年九州の儒学の系譜の跡を尋ねた旅の記事)の中で

「本邦儒学の徒にして学力ある者は、伊藤仁斎父子、物徂徠にしくはなし。亀井昭陽継いで起こり、その経説に於いては遠く伊物(伊藤仁斎と荻生徂徠)の上に出づ。ただ

西陲に僻居し、その学わずかに一方に行はれて広く天下に及ばざりしのみ。」と讃える。

その時まだ生存していた、旧平戸藩の藩儒者 楠本碩水翁に当時の学界追憶談を聞いたなかで、亀井学に話題が及んだ。碩水翁は、「人物としては南冥が上であるが、本分たる経説(四書五経等の説明・

解釈)に於いては昭陽が断然優れている。昭陽は独り亀井家学を担つて、儒学に覇を唱え、当時の儒者に於いて右に出る者なく、また天下の大学者として反論する者なし。」とまで断言する。

◆岩波版『日本思想大系』に昭陽の「読辨道」加わる

ところが昭陽没後百五十年近くを経て、全国版の形で著書が上木(出版)されることになった。

昭和四十年代、約二十年かけて岩波書店から『日本思想大系』が刊行された。これは「古事記」を始めとして、近世までの日本の思想形成上の重要文献を、大系として纏めたもので、全巻六十七。聖徳太子、空海、親鸞、道元、日蓮、新井白石、本居宣長、水戸学等の後

世に影響を与えた著作が網羅されている。

昭陽の「読辨道」は「大系」の第三十七卷「徂徠学派」に収められている。因みに筑前関係では、亀井昭陽のほか貝原益軒(第三十四卷貝原益軒・室鳩巢)と宮崎安貞(第六十二卷近代科学思想の内)の三名が選に入っている。

近世儒学の各学派は、藤原惺窩、林羅山、中江藤樹、伊藤仁斎・東涯、熊沢蕃山等で十巻に及んでおり、荻生徂徠学派はそのうち二巻を占めている。

この「大系」の編集委員は家永三郎、吉川幸次郎、丸山真男、井上光貞、石母田正の各権威者であり、文献選定には疑問は感じさせない。民間の出版とはいえ、官版のような威圧を感じる。なお、当分、類書は出されまい。

昭陽の著作が、このような「大系」に、亀井家学を代表して登場しているのである。このことは、昭陽生前の学界の評価の正しさを後世に於いて裏付けられた形になった。

ただ、時すでに儒学への関心が薄れており、淡窓の予言「天下後世

ニ於イテ公論アルベシ」といえる御時世ではなくなっている。「嗚呼惜哉」と、筆者も嘆息したくなる。



『日本思想大系』第三十七巻「徂徠学派」

◆昭陽をカバール続けたイチ

イチはこのような昭陽を夫とした。夫は性格的には内向性で、人々との付き合いは必要な範囲だけで、進んで社交を好むたちではない。しかるに父南冥はスケールの大きな巨人である。「詩の南冥、文の昭陽」人物は南冥が上。夫は父と比較され、父の無形の圧力とコンプレックスに打ちひしがれそうになったこともある。

それでも夫は黙々とお城勤めと

弟子の育成に励み、不得手な学者仲間の交際も、努めて淡々と、こなし続けた。

一番心の休まるのは、書齋にこもって著作を続けた時である。夫は心の救いを著述に求めた。著作は、弟子の教本として書き写されたが、いつ出版されるやも不明な著作を黙々と、多年にわたり続けたのである。

このようなケースでの奥さんの役割の重要さは、昔も今も変わりはないであろう。

イチは町家の出らしい開明的な明るさを持っていたふしがある。イチは持ち前の明るさでもって、内向性の夫の心を和らげ、不得手な世事の交わり、弟子たちの世話、学塾と世帯のやり繰りをつづけていったのである。

この程度のことは妻の内助の功であって、何も大げさに「家学を支えた女たち」というに当たらないではないか。そのような批判が出そうである。

しかし、父の失脚の跡を継いで、藩士の勤めと家塾の教育・経営そして学問への沈潜、そこにイチの存

在と役割の重要性があった。

筆者はイチを「支えた女」と断言するに憚らない。

◆「家学の先細り」を憂慮

イチに課せられたもう一つの仕事は、家学の後継者作りである。昭陽が結婚当初から心配していたのは、「家学の先細り」を避けるという一事であった。内訓(結婚時にイチに与えた書)でも、これを強調している。自分が父南冥を受け継ぎ、これの発展に精根を傾けてきた自負があるだけに、次の代への期待と不安に、胸しめらるる思いがしたのである。母としてのイチも同じである。

子育ては昔も今も難しい。人生の一大事業である。昔は「氏より育ち」といって、氏(遺伝・素質)よりも育ち(教育)がより重視されていた。教育こそが後継者を作る最大の仕事であると考えた。

亀井家でも男子は、学者としての教育を、当然幼少から始められていた。父昭陽が心血を注いだ教育領分であつたらう。ただ女子については、通常の躰け読み書き程度は仕込まれていたが、ことさら

「空谷日記」文政二年の五月に次の箇所がある。その時昭陽四七、イチ四三、長女トモ(少粟)二十二、次女タカ二十、義一郎十五、鉄次郎十二、三女セイ九、四女ムネ六、そして三男修三郎三歳であった。
 「夜、詩経の会があった。柔柔篇から瞻仰篇まで及んだ。鉄次郎はできがよくない。これを叱つたら

昭陽イチには三人の男子があった。義一郎、鉄次郎、そして修三郎である。

◆期待の三男の夭死

少粟の進歩発展は父昭陽にとって、期待してなかった女子だけに、微苦笑ものであったろう。父が力を尽くした男子の後継者作りは結果として、後述の通り甚だ不十分なものに終わってしまった。

学者育成を心掛けたわけではなかった。イチの教育領分であった。しかし後から振り返ってみると、亀井家学の次の代表選手は、男子ではなくて、女子の少粟ということになってしまった。女の少粟は見よう見まねで父や学塾の模様を習得して、これを深めていったのである。

亀井昭陽妻イチをめぐる系図



よ だ 物 館 古 能

大いに憤る。義一郎と鉄次郎の意
け心はたいへん嘆かわしい。(心配
で心配で)終夜眠れず、何度も寝返
りを打つ。冷水冷酒を飲み、夜明
けになつて少し寝る。この日は日
課をはたさなかつた(このように次
男については憂鬱でならなかつた。

これに反して三男修三郎の聡明
利発ぶりは家学の伝承者として、
期待をもたせるに十分であつた。

「美目翠眉、髪鬢黒くして肌白
く」まるで玉妃のようであり、聖
徳太子の御姿を拝む心地がすると
言う者さえいた。父母の言動をよ
く見習い、塾の授業をみては、小
机を昭陽の部屋に持ち込んで学習
のまねごとをする。「二兄アリト
雖モ、家声之寄、我コノ子ヲ以テ
白眉トナス」(二人の兄はいるが、
この子が最も優れていると、家庭
の中では言いあつていた。)と期
待していた。

この修三郎が五歳の時天然痘で
死亡した。両親の悲痛は、察する
に余りがある。長文の回想文を記
している。(この項「荒木見悟」叢
書日本の思想家南冥昭陽「百道の
秋光より」)

◆長男義一郎(蓬洲)の若死

その三年後今度は長男義一郎が
下痢(現在の赤痢か)で死亡した。
二十一才の若死である。長男には
一般藩士として必要な剣術を学問
と共に修行させていた。しかし十
三才の時、父に同伴して他家訪問
中、脚骨骨折の重症を負い不具が
残つた。藩規により不具者は藩士
としては家督相続ができないので、
家学に専念することになった。昭
陽は次男鉄次郎に藩士を継がせ、
家学は蓬洲(長男義一郎)にと考え
ていた。

成長を経るにつれ、この二人の
学問上の格差は広がつた。昭陽は
蓬洲によつて「家学の細り」をくい
止めようと思つていた。それなの
に、蓬洲が急死した。昭陽は「形神
恍惚、何能記事(もうろうとして
虚脱、日記をつける気は起ころな
いと嘆いた。イチも悲痛に悶えた。

かくて亀井家学も藩士身分も、
次男の鉄次郎が継いだ。賜洲と号
する。賜洲でもつて亀井家学は明
治を迎えた。

長女トモ(友)少乗については、
次回「亀井家学を支えた女たち(五)」
で述べる

次女タカ(敬)はイチの実家姪浜
の五島屋の当主が若死したのでこ
れを継ぎ、唐人町の橋本屋上原太
左衛門の子助次郎と結婚した。

五島屋は聴因以来の亀井家学の
スポンサーであつたので、これか
らも更に絆を深めていくことにな
る。亀井家と五島屋(早船)の間
は、この後、明治と大正二回の婚
姻があつた。南冥の姉モト、昭陽
妻イチ、そしてその次女タカに加
えて、都合五回の嫁取り嫁迎えが
約百五十年の間に行われたことに
なる。

三女セイ(世)は藩の馬廻役宮井
氏に嫁す。宮井氏は百五十石で、
亀井家の十五人扶持よりは、かな
りの大身である。但し宮井氏は、
藩士としては新参で、所謂新知取
立組に属する。如水公以来の古い
家柄の家では、いかに有名な亀井
でも、このような婚組みが成立し
たかどうか。

四女ムネ(宗)は、太宰府亀井家
の後継ぎ養子の少進の妻となる。

太宰府亀井家は昭陽の弟大壮が開
いた医家(儒を兼ねる)であるが、
子になかつたので、大莊の弟子少
進富田氏ともいい花房氏ともいう
に継がせた。

亀井家は本家と今宿亀井と太宰
府亀井の三家があるが、今宿は長
女トモ(少榮)太宰府は四女ムネで、
昭陽の血筋が残つていく。

◆イチの幸福な晩年

イチは幸福であつた。それは夫
昭陽が大の愛妻家であつたことが
最大の理由であつたろう。昭陽は
郷里に帰つていた、旧塾生から在
塾中のイチの世話ぶりを聞き、相
好を崩して喜び、日記に書き留め
る亭主でもあつた。

「生涯娼妓ノ類ニ近ズカズ二色ナ
キニ近シ」。妻の他の異性をしらず、
七人の子をなし、絵の様な家庭を
築いた。その温かい家庭の中で昭
陽の著作が十年一日のように続い
た。

昭陽は天保七年(一八三六)六十
四歳で没した。イチはそれから九
年間生き、六十九歳で去つた。孫
子に囲まれ、幸せな晩年であつた。
(次号は亀井少榮)

▼協同組合 唐人町プラザ甘菜館が運営している唐人町商店街のカランドパークビルの中に甘菜館 show 劇場があります。亀井南冥先生の屋敷跡にあり西学問所「甘菜館」がそのまゝ劇場名になっています。第1回甘菜館まつり記念公演として10月5日より10月8日まで「筑前亀門列伝、甘菜館興亡記聞」が上演されます。南冥先生がどのように描かれているのか…。現代の若者には、どのように、うつっているのか…。パンフレットを同封致します。お出かけ下さい。

事務局こぼれ話

梅雨の終り頃、小川先生の地質調査に再び同行しました。島のまわりをまわったのですが前日の強い風雨の為いろいろなものが海岸に打上がっており、先生に同行しているのは格好ばかりで、目も気持もひたすら波打際へ。めずらしい海藻や貝ばかりでなくタコやウミウシも。両手はすぐにいっぱいになり、みかん箱を拾い収穫にはげみました。先生のお役にはまったく立ってず、たいへん申し訳なく…。でも本当は楽しい楽しい一日でした。たくさん打ち上がっているテングサ（海藻）に混じって島ではめずらしくなったオキウトグサ（エゴノリのこともみつけました。その名のとおり、おきうとの原料です。

島の人々はよくところんを作りますが、これはテングサが原料です。テングサにオキウトグサを少し混ぜて作ることもあり、歯ざわりも、磯の香りも家々ですこしづつ違います。すべて手作りです。とても美味しく夏場には欠く事のできない食べものです。能古島に渡ったら「この市」をのぞいてみて下さい。島の食事処にも寄って下さい。食べれるかも…。

オキウトグサもテングサも、あのなつかしい寒天の原藻ですが、今では、寒天の原料としておもにオゴノリ（海藻）を使用しており諸外国からも輸入を続けているそうです。

公募第4回能古の風フォトコンクール

応募要項

テーマ	「能古の風」（能古島に係る人・物・自然等 制限なし）		
サイズ	白黒 カラーとも四ツ切（ワイド四ツ切可）組写真不可		
賞	グランプリ	1点	賞金 50,000円・賞状
	準グランプリ	1点	賞金 30,000円・賞状
	特別賞	1点	賞金 20,000円・賞状
	入選	7点	賞金各10,000円・賞状

その他 応募作品を平成13年10月9日(火)より11月30日(金)迄当館にて展示
(応募者全員の作品を展示)
・作品は未発表及び発表予定のないものに限る。
・住所・氏名(ふりがな)・電話番号・題名(ふりがな)を明記した紙を同封して下さい。
・入選以上は表彰式に出席。当日原版(ネガ)提出。
・作品はすべて返却致しません。

送り先 〒819-0012 福岡市西区能古522-2 (財)能古博物館
問合せ 「能古の風フォトコンクール」係 ☎092(883)2887

締切 **平成13年9月30日 必着**

表彰式 平成13年10月14日(日) 11時30分～

発表 平成13年10月上旬 入選者のみ直接電話にて御通知。
グランプリ賞の写真と各入選者全員のお名前を「季誌 能古博物館だより」に掲載致します。

能古博物館協賛会・友の会

〔法人協賛会員〕

- 医療法人原土井病院 原寛
ワタキューセイモア(株)
(株)福岡メディアカルリース
(株)オールランドエム
(株)クリニカアールサービス
福岡桜坂郵便局 鬼鞍信孝
福岡能古郵便局 西方正義
福岡赤坂郵便局 戸田正義
日清医療食品(株) 福岡支店
(株)福岡経営管理センター
(株)サンコー
医療法人 恵光会原病院
(株)西日本銀行 和白支店
(株)西日本銀行 千代町支店
(株)西日本銀行 香椎支店
(株)西日本銀行 土井支店
(株)西日本銀行 新宮支店
(株)西日本銀行 箱崎支店
(株)西日本銀行 久山支店
(有)サンネット
(株)福砂屋
(株)昭和鉄工
商業コンサルタント
井本医科器械(株)
(株)九電工 福岡東営業所
(有)高電社
(有)タカミ工業
(株)福東電設
(株)電通技研
出口塗装
笠松会有吉病院
日本スラット(株)
(有)川島工務店
(株)第一特殊金属
(株)ミドリ生コン
(有)サンワ
(株)原塗装(株)
文化シャッター(株)九州特販
エスディ工業
タイヨー設計
(株)奥村組
(有)三洋建設
東邦企画
協同設備
(株)セクタービジネス
(有)ウエダ建築社
九州防災工業(株)
(有)西部エレベーターサービス
(有)豊友設備
総合産業(株)
(株)ニッコク・トラスト
(株)メイデン
(株)ゼロックス
(株)ダイアド(株)
(株)ホスピカ
(株)ニチイ学館
大成印刷(株)
ギャラリイ 倉
福岡ハビテーション病院
江頭会さくら病院
(株)ニチロ九州支社
善隣教
(株)リコー商会
(株)山工業(株)
下橋本組
(株)フナ工業(株)
学校法人原学園
(有)内川工業

(敬称略・順不同)

御寄付者芳名

- 山路 正虎様 「ありがとうございました」
山路 正康様 「ありがとうございました」

〔協賛会員〕

- 松本盛二 ③
南誠次郎 ⑪
中山重夫 ⑦
菅直正登 ⑧
早船直夫 ⑪
浄満寺 ⑩
奥村宏直 ⑦
笠井徳三 ⑦
荒木靖郎 ⑤
安岡光正 ⑤
尾井准輔 ⑩
熊谷雅子 ⑥
石橋観一 ⑪
木原敬吉 ⑧
坂田貞治 ⑤
庄野國雄 ④
原田雄 ⑦
森光英子 ⑦
永井 功 ⑦
緒方益男 ⑦
浦上 健 ⑦
山本 稔 ①
田中貞輝 ②
武内隆恭 ②
白水義晴 ⑦
石野智恵子 ⑪
翠川文子 ⑩
多々羅節子 ⑩
熊谷豪三 ①
有江 勉 ①
山崎 拓 ③
七熊 満 ③
上田 満 ③
西喜代松 ⑥
梅田光治 ⑤
具桐寛子 ⑦
具島菊乃 ③
瀧栄三郎 ③
西村俊隆 ⑥
明石散人 ①
矢部俊幸 ①

〔友の会会員〕

- 立石武泰 ⑪
伊藤 茂 ⑪
玉置貞正 ⑫
水田和夫 ③
木戸龍一 ⑩
岡野六弥 ⑩
星野万里子 ⑧
吉村雪江 ⑧
安松勇一 ⑩
上田良一 ⑦
高田浩二 ⑨
桑野次男 ⑨
藤木充子 ⑨
和田宏子 ⑨
板木継生 ⑦
行成静子 ⑩
片岡洋一 ⑩
橋川文之 ⑧
橋本敏夫 ⑦
山内重太郎 ⑧
都筑久馬 ⑧
齋藤 拓 ⑧
横山智一 ⑧
高賀清子 ⑧
西 政憲 ⑨
岡本金蔵 ⑨
三宅 碧子 ⑩
星野金子 ⑩
林 十九楼 ⑦
宮 徹男 ⑩
安永友儀 ⑥
織田喜代治 ⑥
上田 博 ⑦
鶴田スミ子 ⑦
塚本美和子 ⑤
伊藤康彦 ⑤
寺岡秀実 ④
原田種美 ⑤
奥田 稔 ⑤
井上敏枝 ⑤
吉原湖水 ⑨

- 隈川清次 ⑦
吉富とき代 ⑤
浜野信一 ⑤
大山正一 ⑥
川山政志 ⑥
葉山貞雄 ⑦
岸 洋子 ⑧
柳山美多恵 ⑦
久芳正隆 ⑦
半田耕典 ⑥
武藤瑞之 ④
庄山雅敏 ⑥
吉田洋一 ⑤
永岡喜代太 ⑤
神戸純子 ④
渡辺美津子 ⑤
山田博子 ⑥
佐藤泰弘 ④
前田静子 ④
飯田 晃 ⑤
神戸 聡 ③
田里朝男 ③
吉田一郎 ③
池田修三 ⑤
黒田喜美子 ③
小川正幸 ③
岩谷正子 ③
榎藤菊朗 ②
井手俊一郎 ②
増田義哉 ③
宮崎熊太郎 ⑤
土井千草 ⑤
松坂洋昌 ③
福永 実 ①
鹿毛博通 ④
古川映子 ④
古川俊規 ④
伊藤泰輔 ④
田代直輝 ⑩
執行敏彦 ⑧
渡辺千代子 ②
後藤和子 ⑦

- 脇山満一郎 ⑩
川浪由紀子 ⑧
川田啓治 ③
足達輔治 ⑤
中村ひろえ ⑨
古賀謹二 ⑦
野尻敬子 ③
大野幸治 ④
柳田正己 ⑨
青木良之助 ⑨
神崎憲五郎 ④
金子柳水 ④
佐野 太 ⑧
原 祐一 ②
宮崎春夫 ⑩
鬼丸碧山 ⑦
山崎エツ子 ④
小山元治 ④
吉瀬宗雄 ⑩
古賀義朗 ⑩
西山正昭 ⑥
市丸喜一郎 ②
豊島嘉穂 ⑥
吉田陽一 ⑦
守瀬孝二 ①
鋤田祥子 ④
甲本達也 ⑥
田中政宏 ⑩
鳥井裕美子 ②
濱北哲郎 ⑩
大塚博久 ⑦
小山富夫 ⑦
小川雅夫 ⑤
辻本雅夫 ⑤
松田 清 ⑦
杉浦五郎 ⑦
大野彰子 ⑦
中谷英彦 ③
野崎逸郎 ⑤
住本 霞 ②
山根ちず子 ⑩
村山吉廣 ⑧
住本直之 ⑧
大島節子 ④
間所ひさ子 ⑨

- 伊藤英邦 ①
鹿毛光子 ①
古賀朝生 ①
林 正孝 ②
井上雷策 ②
田中寛治 ②
土屋伊達雄 ①
白井重儀 ②
原 礼子 ①
原 康二 ①
原 牧子 ①
杉みどり ②
原 祐一 ②
山下清久 ②
杉原正毅 ③
大久保昇 ②
党 隆雄 ③
福澤 昌弘 ③
小嶋幸雄 ②
福本孝行 ③
樋口陽一 ②
木下 勤 ⑦
酒井カツヨ ⑧
佐々木謙 ⑧
島 義博 ③
田上紀子 ⑧
中畑孝信 ⑧
西島道子 ⑫
西嶋洋子 ⑧
村上靖朝 ⑧
山本光玄 ⑧
山本光龍 ①
岸川 龍 ①
吉開史朗 ①
田中靖高 ①
香立スミエ ①
藤瀬三枝子 ①
野見山 実 ①
頃末隆英 ①
友原静生 ①
森川智子 ①
山本信行 ①
山見商会 ①

- 武田正勝 ②
武田初代子 ②
近藤雄文 ②
西嶋克司 ③
榊島政信 ③
村上 清 ⑦
井上 清 ⑦
上杉和稔 ⑤
木村秀明 ⑤
富田英寿 ⑥
富田哲子 ⑥
益尾天嶽 ⑥
山崎剛一 ①
小山正博 ①
平山孝文 ①
石橋正治 ①
亀石正之 ①
萩野忠行 ②
藤原一枝 ②
松尾清美 ①
蓮尾正博 ①
森 祐子 ①
村上 牧 ①
小谷修一 ①
阿部昌弘 ①
結城進洋 ③
永石順洋 ③
重松史郎 ①
藤吉マツエ ①
亀井勝夫 ①
山本光玄 ①
岸川 龍 ①
吉開史朗 ①
田中靖高 ①
香立スミエ ①
藤瀬三枝子 ①
野見山 実 ①
頃末隆英 ①
友原静生 ①
森川智子 ①
山本信行 ①
山見商会 ①

能古博物館ご案内

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 12月1日~2月末日の冬季のみ休館
入館料 大人400円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819-0012 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2887
FAX(092) 883-2881
ホームページ http://www.nokonet.com/museum
メールアドレス museum@nokonet.com

※新規の御加入先号以後、平成十三年八月二十日現在を、記載いたしておりますので、何卒、芳名をご確認ください。
ありがとうございました。
自然と文化の小天地創造
協賛会 (個人年間1万円(何口でも可)
友の会 (法人年間3万円(何口でも可)
(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)
館維持、資料収集、施設整備等の
資金援助を受ける
納入方法 郵便振替 01730960970
財団法人 能古博物館
右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。

